



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ホセア書における「神の民」の問題 : 「神の子ら」をめぐって
Author(s)	菅沼, 英二; Suganuma, E
Citation	基督教学, 23, 36-45
Issue Date	1988-07-18
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/46466">https://hdl.handle.net/2115/46466</a>
Type	journal article
File Information	23_36-45.pdf



## ホセア書における「神の民」の問題

—「神の子ら」をめぐる—

菅 沼 英 一

## 序、問題提起

旧約聖書の契約思想の研究史において、ウェルハウゼン (Wellhausen, J.) が特に契約研究への関心を呼びおこした点において、その貢献の大きいことは否定できない。

しかし、彼は著書「イスラエル史」<sup>(1)</sup> (Geschichte Israels, 1878) の中で、「契約概念でイスラエルとヤーウェとの関係を表現することは大預言者たちの説教の所産であり、それ以前には、ヤーウェとイスラエルとの関係は父と子という自然な関係として理解されていた」と述べている。彼によれば、預言者たちがイスラエルの古い宗教を終焉させ、新たに倫理思想の高揚をもたらしたのである。そして預言者以前の古い宗教理解においては神とイ

スラエルの関係は父と子という自然的絆として表現されていたというのである。しかし、この事は古代オリエントの宗教一般において妥当なことであつたとしても、旧約聖書において、この事が妥当するかどうかは再検討されねばならない。

## I. 最近の研究状況

ライト (G. E. Wright) は「旧約聖書宗教の用語とその意義」<sup>(2)</sup> (1942) と題する論文で、旧約聖書における父と子の関係の用語とその意義の問題を取り上げている。彼によれば、旧約聖書の中で「父と子」の図式は不思議なことに少なく、むしろ「支配する主」という神概念が (ケーラーが主張したように) 基本的な主題である。従って人間は神の子として考えられるよりはむしろ「神に仕える者」なのである。それ故、神と民との関係が「夫婦の関係」や「父子の関係」で表現されている場合でも、「主と仕える者」のモチーフと結合されている (出エジプト四・22)。「父と子」の図式が「主人と仕える者」のモチーフと結合されている点に旧約聖書信仰の特色があり、この「父・子」の用語の起源はモーセ時代にまでさかのぼると考えられると論じられている。彼によれば、

捕囚期前の預言者が「父と子」の図式を用いた場合にも、「支配する主に仕え、服従する」倫理性が重視されている点にその特色があると云うのである。

フエンシヤム (Fensham) は「条約・契約用語としての父と子」(1971)と題する論文で、「父—子関係は契約概念を表わす用語」であると論じている。この考え方はマッカーシーと同一線上にあると言える。マッカーシーはその論文で「申命記において神への愛も父・子関係も、契約概念であることを論じているのである。しかし、申命記及び預言書において、契約概念として父・子関係が考えられたことの意義もしくは意図は何であったかは必ずしも明らかにされていない。

シュエミット (W. H. Schmidt) は「歴史における旧約聖書の信仰」(Altestamentlicher Glaube in seiner Geschichte 1968; 4版: 1982)において、「神の息子」の称号の問題を取り上げている。「神の息子」という称号の受容と共にイスラエルで実現した一大変化はこの父子関係(王から)民全体にまで拡げられたことである。神と民との関係の特徴づけるこの語は預言書において初めて現われる。「ホセアとその後継者たちは神の息子の比喩を用いて、父の愛と子の反抗とを表現した。父—子と

いう関係は、預言者の宣告の中で特定の意味を獲得した。この関係は法的というよりもむしろ人格的・情愛的なものとして描かれている。しかし繰り返し強調されているのは、息子のあらゆる反抗にもかかわらず貫かれる父親の愛情なのである<sup>(6)</sup>。彼は父—子関係における人格的・愛を強調しているが、「父—子」の図式のもつ契約の意味との関連について明らかにしていない。

このような最近の研究状況をふまえながら、「旧約聖書における神の子ら」の問題を再検討したいと思う。

## II. 旧約聖書における神の子らの用語について

### 1. 「神の子ら」(イスラエル・民として)

出工四・22 「わたしの子」(わたしの長子)

(肯・単)

申一四・1 「主の子ら」(聖なる民)

(肯・複)

申三二・5 「神の子らではなく」(曲がった

世代)

申三二・20 「真実のない子ら」(逆ろう世代)

(否・複)

イザヤ一・2 「わたしは『子ら』を育てた」

(肯・複)

- 一・四 「墮落した子ら」 (否・複)
- イザヤ三〇・九 「偽りを言う子ら」 (否・複)
- ホセア二・一 「生ける神の子ら」 (肯・複)
- 二・六 「淫行による子ら」 (否・複)
- 十一・一 「(エジプト以来) わが子とした」 (肯・単)
- 十三・一三 「知恵のない子」 (否・単)
- (エレミヤ二・三 「収穫の初穂」)
- エレミヤ三・一四 「背信の子ら」 (否・複)
- 三・一三 「子らの中で」
- 三・二二 「背信の子ら」 (否・複)
- 四・二二 「愚かな子ら」(わが民) (否・複)
- (三一・九 「わたしの長子」) (肯・単)
- 三一・二〇 「かけがえのない息子」 (肯・単)
- (喜びを与えてくれる子)
- 詩篇八二・六 「いと高き方の子ら」 (肯・複)
- イザヤ四三・六 「わたしの息子たち」 (肯・複)
- 四五・一四 「わたしの子ら」 (肯・複)
- 六三・八 「偽わりのない子ら」 (肯・複)
2. 神の子としての王の即位(契約定式)
- サムエル下・七・41 「わたしの子」 (ダビデ王)

- 歴代誌上・一七・一三 「わたしの子」 (ダビデ王)
- 歴代誌上・二八・六 「わたしの子」 (ソロモン王)
- 詩篇二・七 「わたしの子」
- (詩篇八九・28 「長子とし」)
3. メタファ(教育的用法)として、
- 箴言三・一三 「かわいい息子をこらしめる父の  
ように」
- 詩篇一〇三・一三 「父がその子を憐れむように」
- 申命記一・三十一 「父が子を背負うように」
- 八・五 「人が子を訓練するように」
- III. 旧約聖書における神の子らの用語法
1. 「神の子ら」の用語は族長時代の記述には見られず、その時代には「父祖たちの神」という表現が用いられた。ライトが指摘するように、モーセ以降(出エ四・22)、エジプトからの救済に関連してホセア書に「わたしの子」(ホセア十一・1)という用語が用いられている。
2. 「神の子」が王の称号として用いられ、ダビデ契約及びソロモン契約において定式化された。
- 「わたしは彼(ダビデ)の父となり、彼はわたしの子となる」(サムエル下七、14、歴代誌上一七・13)。

「わたしは彼（ソロモン）を選んで、わたしの子とし、わたしはその父となる」（歴代誌上二八・6）。

古代オリエントでは王が「神の息子」と呼ばれた。シュミットが指摘するように、イスラエルは、神の息子としての王という古代オリエント的表象を変更された把握によって受け入れた。それは神と王との相互関係を契約定式（召命定式）によって表現している点に特色がある。

3. 旧約聖書における「神の子」の用語の特徴は「王」とどまらず、イスラエルの民全体にまで拡大されたことである。シュミットの言う如く、「神の子」の「民主化」(democratization) が行われている点に大きな意義があり、「父・子関係」は神と民との関係の特徴づけるものとなっている。この「神の子の民主化」の用法は預言者たちによると考えられる。

預言者ホセアは「エジプトから彼（イスラエル）を呼び出し、わが子とした」（十一・1）と語っている。

出エジプト記四・22における「イスラエルはわたしの子」という言葉は預言者の「使者の託宣」様式の中に見出されることから、預言者的影響のもとにあると考えられる。「わたしの子」（ベニー）と並行して記されている「わたしの長子」（ベコリー）はエレミヤ13・9と二

回しか旧約聖書の中でイスラエル（エフライム）に適用されていないことも注目しと思う。

4. 契約 R<sub>1b</sub> の預言様式における「神の子ら」

「神の子ら」の否定的表現は神に背くイスラエル、神との契約を破棄した民に対する批判として用いられている。

申命記三二・5 「神の子らでない」

三二・20 「真実のない子ら」

イザヤ一・4 「墮落した子ら」

ホセア二・6 「淫行による子ら」

エレミヤ三・14・22 「背信の子ら」

四・22 「愚かな子ら」

このように、神との関係におけるイスラエルの「否定的表現」は「契約 R<sub>1b</sub> の預言様式」の中に共通して見出される。即ち、申命記三三章、イザヤ書一章、ホセア書二章・四章、エレミヤ書二〜三章は互に文学的関連性をもつのみならず、契約 R<sub>1b</sub> 様式とその内容に共通性をもっている。この預言様式はイスラエルが神ヤハウェとの契約関係を破棄した宗教的危機に直面して、生れたものである。神との契約を破棄したイスラエルはもはや「神の民」、「神の子ら」と呼ばれることは出来ない。それゆえホセアは「ロ・アンミ」（わたしの民でな

い・一・9、二・25)とイスラエルを呼んだ。或いはまた「淫行による子ら」とも呼んで、イスラエルの罪の現実を訴えた。そのように語る預言者には一つの意図があった。それは、単にイスラエルの罪の現実を審くためではなく、イスラエルをしてかつては「神の子ら・神の民」であったことを思い起させ、悔い改めて神のもとへ立ち返らせるためであった(ホセア一四章1、エレミヤ三章12、14、三六章3、7)。

預言者ホセアは神とイスラエルとの関係を「夫婦の関係」・結婚のイメージで表現した(一章2〜三章)。

契約関係は「夫婦の関係」であるならば、その関係が破棄された場合、その関係は喪失されてしまうのである。しかし「父—子の関係」においてはたとえその子が離反しても、父—子の関係は決して喪失されることはありえない。

神とイスラエルとの契約関係が「父—子関係」であるならば、たとえイスラエルが神を捨て(申命記三二・15、ホセア四・10、エレミヤ二・13、イザヤ一・4)、誓いを忘れ(申命記三二・18、ホセア二・15、四・6、エレミヤ二・32、詩五〇・22)、神に背いた(ホセア七・13、エレミヤ二・8、29、イザヤ一・2)としても、父—子

の関係は決して失われない。

それゆえ、ホセアは神とイスラエルとの関係を神の救済史の現実と結びつけて「わたしはエジプトから、わが子を呼んだ」(十一章1)と語り、子に対する父なる神の愛を示し、父—子の関係の現実的な実現(回復)を目指したのである。

#### IV. 契約関係の回復としての「神の子ら」

1. ホセア書二章一〜三節では「wehayah」で始まる終末的救済預言定型が二回繰り返されている。その文学的特色は終末的救済預言であり、一章の審判預言と対比されている。そして民の大きな転換が強調されている。

即ち、ロ・アンミ(わが民でない者)が「生ける神の子ら」と呼ばれ、悲劇のイズレエル(一・5)が栄光のイズレエル(二・2)となり、ロ・ルハマ(憐れまれぬ者)がルハマ(憐れまれる者)へと転換されるのである。

契約関係を破棄することによって、もはや「神の民でない者」(ロ・アンミ)が、「父—子の関係」の中で「生ける神の子」とされることによって、契約関係を回復され、再び「神の民」(アンミ)となることが出来るのである。

「生ける神の子ら」と呼ばれる大きな転換は終末的救済未来において約束されるものであり、その転換は「父なる神の愛の御業」によるものであることを示している所にホセアの預言の特色がある。ホセアは次のように語っている。

「わたしの心はわたしのうちに変わり、

わたしのあわれみは激しく燃え上がった」(十一・8)

「わたしは背く彼らをいやし、喜んで彼らを愛する。

まことに、わたしの怒りは彼らを離れ去った」

(十四・5)

2. 神のいやしによる回復

イスラエルの背信は神のいやしによってのみいやされ、契約関係は回復される。この神の「いやし」は申命記三二・39、ホセア六・1、十四・5、十一・3、エレミヤ三・22、三〇・17に述べられており、この「いやし」の概念も「契約 *Brit* 預言様式」に共通している。

3. 生ける神の子らについて。この表現は旧約聖書の中でユニークなものである(メイズ<sup>(9)</sup>)。ヤールウェが「生ける神」と呼ばれているのはヨシュア記三・10、詩篇四二・3、八四・3で、この外、申命記三二章に「わたし(ヤールウェ)は永遠に生きる」(39、40)、申命記五章に

「生ける神の声」(26)、エレミヤ二章に「生ける水の源であるわたし(ヤールウェ)」(13)と記されている。このように「生ける神」の信仰伝承はモーセの歌、ヨシュア、ホセア、エレミヤ、コラの詩篇へと継承されてきた。それは「ヤールウェこそ『生ける神』である」のに対し、「バアルは『死んだもの』である」という、ヤールウェ信仰とバアル信仰との戦い・信仰の危機の現実を背景としている。それゆえ、バアルについては「神でないもの」(申命記三二・17、21、ホセア八・6、エレミヤ二・11)「空しいもの」(エレミヤ二・5、申命記三二・21)「無益なもの」(エレミヤ二・5、8)と記されている。

4. 終末的救済預言(ホセア二・1〜3)について、この章句はマソラ本文では二章1〜3節であるが、七十人訳(ギリシャ語訳)では一章10〜二章1、である。この章句を三章の終わりにおく説(カトリック訳に多い。エルサレム聖書訳、新アメリカ訳、フランシスコ会訳等)、また二章の終わりにおく説(ワード訳、ローマ書九章25〜26参照)がある。新共同訳聖書はマソラ本文通りに二章1〜3においている。(口語訳は七十人訳によっている)。一章の審判預言に対比して、二章1〜3に終末的救済預言がおかれている所に、ホセア書の特色

を見出すことが出来る。

この終末的救済預言は後の時代(捕囚後)の編集者による加筆であるとする説もある(ロビンソン<sup>(1)</sup>、リンドブ<sup>(2)</sup>、ローム<sup>(3)</sup>、フォーラー<sup>(4)</sup>、ワード等<sup>(5)</sup>)。

しかし、ゼリン、ロストは次のように主張している。

「ホセアの終末論は救済の終末論である。…最後の救済の期待が一本の赤い糸のようにホセア書全体を貫いている。……これはホセアの見解に由来するものである」と。ウォルフもこの終末的救済預言の中にホセアの思想の特質を見出している。

## 結

神との契約を破棄した民(ロ・アンミ)がどうしたなら再び神の民(アンミ)となるか出来るか。預言者ホセアはこの問題の解決を「父・子」関係に見出した。

神ヤーウエがエジプトから「わが子」を呼び出した救済史(十一・1)を回顧し、現実には墮落した「淫行の子ら」(二・6)に悔改めを迫る契約訴訟預言から父の愛をもって「生ける神の子ら」の立ち返りを待つ終末的救済預言へと一大転換したのは「父子関係」を基軸として初めて可能であった。ホセア書における「父・子」関係

概念は神の民の回復という救済史における一大転換をもたらしたのである。

(註)

- (1) J. Wellhausen, *Geschichte Israels*, 1878. *Prolegomena to the History of Ancient Israel* (ET), 1885.
- (2) G. E. Wright, *The Terminology of Old Testament Religion and its Significance*, 1942. *JNES* 14, pp. 404-414.
- (3) F. C. Fensham, *Father-Son as Terminology for Treaty and Covenant*, *Albright-Festschrift* 1971, pp. 121-135.
- (4) D. J. McCarthy, *Notes on the Love of God in Dt. and the Father-Son Relationship between Yahweh and Israel*, *CBQ* 27, 1965, pp. 144-147.
- (5) W. H. Schmidt, *Alttestamentlicher Glaube in seiner Geschichte*, 1968. *The Faith of the Old Testament* (E. T.), 1983. 歴史における旧約聖書の信仰(邦訳:山我訳) 1985. (5) 邦訳三八五頁、三九〇頁。
- (6) J. Lindblom, *Prophecy in Ancient Israel*, 1962 Oxford. 菅沼英二「ヘレミヤ書第二章の様式・伝承史研究」*基督教学第七号*、一九七二、一～二八頁。
- (7) 菅沼英二「ヘレミヤ書第二章の神学的研究」—*契約 Rib* 伝承史神学—*神学三四・三五合併号*、一九七三、一二五～一六一頁。「契約 Rib の預言様式」は「契約破棄を訴える預言様式」ということが出来る。

- ⊗ G. Fohrer Introduction to the Old Testament, (E. T.) 1970, p. 42b.
- ⑥ J. L. Mays, Hosea, (OTL) 1969, p. 30-34.
- ⊗ J. M. Ward, Hosea (A. Theological Commentary) 1966, pp. 23-31.
- ⊕ T. H. Robinson, Die zwölfkleinen Propheten, I. 1938.
- ⊗ ヤハハニマケル 巴拿單轉譯離 (聖經出經部) 1949年 (聖112) 144頁~147頁。
- ⊗ H. W. Wolff, Hosea (ET) (Hermeneia) 1974, pp. 24-29.
- Bibliography**
- Bergman-Ringgren, H. Haag, (bén), Theological Dictionary of The O. T. Vol. II, (E. T.), 1975, pp. 145-159.
- H. Ringgren, ('abh), Theological Dictionary of the O. T., Vol. I, (E. T.), 1974, pp. 1-19.
- G. Fohrer, *wäg* in the Old Testament Theological Dictionary of the N. T., V. VIII, (E. T.), 1967, pp. 340-353.
- G. E. Wright, The Terminology of Old Testament Religion and its Significance, JNES 14, 1942, pp. 404-414.
- F. C. Fensham, Father-Son as Terminology for Treaty and Covenant, Albricht-Festschrift 1971, pp. 121-135.
- P. Winter, Der Begriff "Söhne Gottes" im Moselied, ZAW 67, 1955, SS. 40-48.
- J. Muilenburg, Father and Son, Theology and Life 3, 1960, pp. 177-187.

- D. J. McCarthy, Notes on the Love of God in Dt. and the Father-Son Relationshipbetween Yahweh and Israel, CBQ 27, 1965, pp. 144-147.
- J. W. McKay, Man's Love for God in Deuteronomy and the Father/teacher—Son/pupil relationship, VT 22, 1972, pp. 426-435.
- E. W. Nicholson, God and His People, Oxford, 1985.
- Covenant Rib-Form**
- E. Wurthwein, Der Ursprung der prophetischen Gerichtsrede, ZTK 49, 1952, pp. 1-16.
- B. Gemser, The Rib or Controversy-Pattern in Hebrew Mentality, VTS III, 1955, pp. 120-137.
- H. B. Huffmon, The Covenant Lawsuit in the Prophets, JBL 78, 1959, pp. 285-295.
- W. L. Holladay, Jeremiah's Lawsuit with God, Interpretation 17, 1963, pp. 280-287, Jeremiah (Hermeneia) 1986.
- J. Hurvey, Le 'Rib-Pattern', Biblica 43, 1962, pp. 172-196.
- G. E. Wright, The Lawsuit of God, A Form Critical Study of Dt. 32, Muilenburg-Festschrift 1962, pp. 26-67.
- D. A. McKenzie, Judicial procedure at the town gate, VT 14, 1964, pp. 100-104.
- M. D. Roche, Yahweh's Rib against Israel, JBL 102, 1983, pp. 563-574.
- K. Nielsen, Das Bild des Gerichts (Rib-Pattern) in Jes. 1-

- 12, VT 29, 1979, pp. 309-324. Yahweh as Prosecutor and Judge: An Investigation of the Prophetic Lawsuit (Rib-Pattern) (JSOT Supplement Series 4. Sheffield University) 1978.
- G. W. Ramsey, Speech Forms in Hebrew Law and Prophetic Oracles JBL 96, 1977, pp. 45-58.
- J. Limburg, The Root Rib and the Prophetic Lawsuit Speeches JBL 88, 1969, 291-304.

付 共通な表現様式

聖なる民	ぶどうの樹	ヤコブとイスラエル	エフライム	子ら (否定的)	わたしの子ら (ベニー)	わたしの子 (ベニー)	わが長子 (ベコリ)	わが民 (アンミ)	イスラエル	いやす (神)	聖者 (カドシユ)	生ける神	父 (アープ)	ヤーウエ (主)	申命記	ホセア	エレミヤ	詩篇	イザヤ	備考
147 26、 2826 919	32 32	32 8、 9	33 17	32 5、 20	14 1			32 43		32 39		32 40、 5 26	32 6							
	142 814、 10 1	12 13	54 1117、 85 3	132 16	2 1	11 1	231 39	2 3、 25		146 51、 711 13	11 9、 12 1	2 1、 4 15	11 3							
	2 3	2 21、 6 9	2 4	31 9、 18、 20	43 2214、 22	31 20、 20	(89 28)	312 3211、 13		3 22、 30 17	50 29、 51 5	2 13、 2310 3610	42 1927、 313、 9							
	50 5 15	80 9、 15	238178 55、 10521、 1071	8078 39、 67				8150 94、 127、 14		107 20、 147 3	78 41、 89 7	(4284 23 8)	(8689 627、 )							
	63 18、 62 12			1 4	451 112、 6343 86			63 8			1 4、 6 3		6463 716、 16、							
出エ 19 6						出エ 4 22	出エ 4 22		民出 エ 1215 1326	ヨシ ユ ア 24 19	ヨシ ユ ア 3 10									